



新しい出発にあたって

森林研究本部 林産試験場長 浅井定美

林産試験場は昭和 25 年（1950 年）に開設され、今年 60 周年を迎えました。

この節目に、当場は林業試験場とともに道立総合研究機構（略称：道総研）の森林研究本部を構成し、全体で 22 の試験場からなる総合機関の一員として、4 月から新しい歴史を刻んでいくこととなります。

豊かな森林を育てその機能を高めること、林業・林産業を新世紀にふさわしい産業として再生すること、森林資源を繰り返し再生・利用する循環型経済を実現することが、森林研究本部の使命です。

森づくりから木材の伐り出しまでを担当するのが林業試験場で、これに対し、私たち林産試験場は、木材を原材料とする製造業（工業）や菌類など森林資源の利用・加工を一括して「林産業」とし、その振興発展を図ることを任務としています。

北海道の比較優位のひとつに、豊かな自然資源、農林水産業があります。

水産や農業が生み出す「食」の加工分野は、近年の統計において、北海道の工業出荷額の 4 割程度と大きな要素ですが、長く厳しい環境におかれてきた木材関連もなお 1 割強を占め、この分野も同じく、北海道の将来を左右する重要な産業であることを示しています。しかも、製品の多くは建築・土木などの基礎資材であり、加工・流通・建設など、川下への波及効果は大きく、森林資源の利用向上は、中山間地帯が多い北海道の基本課題のひとつです。

開拓 150 年、戦後 65 年を経て、北海道の自然や人文とともに、森林・林業・林産業もおおきく変貌しました。かつて世界に「木材の宝石」といわれたナラ、セン、カバ、タモ、ニレなど道産広葉樹や、緻密で加工に適したエゾマツ・トドマツに代表される優良な天然資源は今ほとんど失われ、本格的な回復には今後多年を要します。

しかし、これにかわって、1950 年代半ばからの全国あげての大植林によるカラマツ、トドマツなど人工林資源がたくたくましく成長、主役として登場し、その森林資源量は毎年、史上空前の数字を更新しています。

森林は最大の二酸化炭素の吸収源ですが、仮に、林業・林産業の再生が果たせず、資源として伐りだし利用されるはずの高齢人工林が手入れ不足のまま増加すると、伸び盛りの森林が減って、光合成による二酸化炭素の吸収量が全体として頭打ちとなり、吸収源としての森林の機能が大きく低下するという事態が進行することになります。このため、人工林の伐出、加工利用は、環境と経済の両面に大きな効果を発揮します。

今世紀に入って地球の温暖化や人口の爆発的な増加、世界経済の発展により、環境制約とともに資源・エネルギー・食料の制約がさらに強く意識されるようになりました。人類の存続・発展のためには、限りある地下資源・化石エネルギーだけに依存するのではなく、地上の再生可能資源・エネルギー資源も最大に利用しつくすことが不可欠となっています。森林資源は、代表的な天然・再生資源のひとつであり、今後、林産加工分野が新たに大きな成長分野になっていくことは確実であり、そのための技術革新は今や焦眉の課題です。

林産試験場の主な役割は、産業活動の主体である企業を対象とし、新技術・新製品・新事業のための研究開発を支援し、企業業績の向上を通して、関連の雇用と出荷額を増大させながら、産業の経済で豊かな森づくりにも貢献していくことにあります。

新しい出発にあたり、私たち林産試験場は、その使命と役割をあたためて問い直し、北海道の将来に向かい、着実な答えと実績を積み上げるべく、新たな決意で業務に取り組んでまいります。

皆様のご理解、ご指導、ご支援をよろしくお願い申し上げます。